

東筑紫短期大学附属幼稚園

園内研修会テキスト

(幼児) 教育方法論の前提となるもの

ーモンテッソーリ、コメニウス、フレーベル、
ペスタロッチの人間観・教育観を中心にー

学校法人 東筑紫学園

キャリア教育推進支援センター長

九州栄養福祉大学 兼任講師

中村 吉男 著

目次

はじめに	1
第1章 M.モンテッソーリの生命の解放の教育	4
(1) キャリア教育推進の背景にある社会経済構造の変化	
(2) マリア・モンテッソーリの科学的教育学	6
(3) モンテッソーリ教育における教育観	11
(4) モンテッソーリ教育における仕事観	12
(5) 最後に	19
第2章 コメニウス、フレーベル、ペスタロッチの教育観	20
(1) コメニウスの「大教授学」における人間観と教育の目的	
(2) フレーベルの「人間の教育」における人間観と教育の目的	23
(3) ペスタロッチの「隠者の夕暮れ」における人間観と教育の目的	25
(4) 本学の建学の精神に基く人間観	29
(5) 本学の建学の精神に基く教育観	30
本稿を終えるにあたって	30

はじめに

キャリア教育の概念に関しては本文で詳しく述べるが、最初に結論から言うと、キャリアデザインに基くキャリア教育とは、単なる職業指導・訓練や職業意識の形成に留まるものではなく、本文でも詳述するが、生涯教育につながる人生に深く根ざした概念であるということである。

そもそも、アメリカで始まったキャリア教育は、普通教育（知的教育）と職業教育の合体を目指したものであった。「キャリア教育の父」と呼ばれた米連邦教育局長のマーランドの言によればキャリア教育を次のようにとらえている。

「私たちが、今日、キャリア発達を語り合うときは、ある特定の仕事や訓練についてではなく、生涯を通じて進歩向上しようとする人々の能力をどう高めるかについて語り合っているのである」（1971年1月23日；全米中等学校長会年次大会の席上での言葉）

そういう意味でのキャリア教育の本質は、当然人生の意義と価値を追及する人間教育・人格教育を根底としなければならないと考える。人間とは何か、人生とは何か、人間社会とはそもそもどのように形成され、発展していつているのか。人間社会における企業やあらゆる種類の職業は何のために存在しているのか。そのような模索の中で人生及び社会における仕事の意義そして価値とは何かを考えるものがキャリア教育の核とならなければならない。

そもそも、キャリア教育とって「教育」と言う概念を使用している以上、本質的に本来の意味での「教育」を内包していなければならないであろう。本来の意味での「教育」とは単なる「指導」でも「訓練」でもないのは当然のことである。しかしわが国では、キャリア教育というと職業訓練や職業選択を目標にしたガイダンス的なものとして浅く捉えられてきた向きがあるのは事実である。

本来教育とは、社会において仕事を持った社会人としての役割を担っていくためのあらゆる必要な素養を身につけるためのものである。社会において仕事をするのが人間として社会人としての務めであり責任である。社会で応分の役割を果たすことが人間の義務でもある。学校教育での知識伝授はそのためのものであった筈である。

それ故、教育上発達段階に応じた仕事観・職業観の形成はもとより、必要な基礎的専門的知識や技術も必要に応じて習得していくべきものである。端的にいえば、特に初等・中等教育においては、概念的にせよ体験的にせよ仕事というものを知り、更に理解していく教育課程が準備されなければならない。

そして、更に将来自分に見合った職業にむけて専門的な知識・技術を習得するために高等教育や専門学校が存在しているのである。そういう意味では、仕事を前提にしない教育は本来の教育ではないと言える。

米連邦教育局長のマーランドが、前述した年次大会で「すべての教育は、キャリア教育であるべきである」と唱えたのもそういう意味からであろう。

ところが、アメリカでもそしてわが国においても、その学校教育が仕事・職業と離れて、学校教育における知識の伝授が、成績の良し悪しや、進学や学歴のため、ただ、将来の安定した豊かな生活を送るための手段となっていた。多くの中学においても、また高校においても偏差値によって進路が決められていったのも事実である。

そのため、多くの子供たちが、何のために勉強するのかも分からず、仕事の価値観や人生の意義等も教えられることもなく、また自ら深く考えることもなく、進学するか職業に就いていった。それによって、成績のみで、人間の能力や人間性の格差までがつけられるような社会が形成されていったのは社会学的にもいえるであろう。

その結果、何のために仕事をするのか、そもそも何のために生きているのかという教育の根本を学校教育は徐々に見失っていったといわざるを得ない。マーランドが、このキャリア教育をアメリカにおける教育改革の柱に置いたのも当然であったといえる。

今回論述したキャリア教育論は、仕事を前提とした本来の教育の原点に立ち返るためのものとして展開した。逆説的ではあるが、マーランド流に言えば「キャリア教育は本来の教育の原点からあらためて出発すべきである」ということになる。

本来の教育論とキャリア教育論は重複するものであり、その本質的な核となる部分はむしろ一致するものである。本当の教育論は、仕事を通じて人生に深く根ざしたキャリア教育論につながるものである。逆に言えば、仕事を中心とした人生形成を目指すキャリア教育は、当然人生における個人の成長及び社会の進歩発展を目指す本来の教育論と機を一にしなければならないであろう。

人間にとって仕事とは、人生における重要な要素であると誰もが認識していると思う。仕事に生きがいと意義や価値を感じることは、人生そのものに対する幸福感の源泉になるものである。

本来教育というものは子供たちに基礎学力の養成も含めて、将来の職業において必要とされる諸々の資質（計画性・主体性・協調性・積極性・柔軟性・責任感・緻密さ等）を幼少の頃から養うものでなければならないであろう。

その上で、社会人として仕事を通じて立派に社会に貢献できる専門知識と人格を育成するものであるというのは共通の理解だと思われる。これが教育の本来の目的だとすると、キャリア教育こそまさに本来の教育の目的と一致するものであるという事が言える。

ところで、このようなキャリア教育で求められる資質を、作業という工程を通して小学校の段階から養成するプラグマティック（実用主義的）な教育論を展開したジョン・デューイ（John Dewey）がいる。彼の理論は、まさに現代のキャリア教育の先端を行くものであり、学校の教育課程全般に係る重要な内容を含んでいるが、詳しくは別の論文で論じた。

今回の論文は、本来の教育の原点に立って、教育においてどういう人間を育成すべきなのか、そもそもそのためには、人間というものをどう捉えるべきであるかという点に絞って論述したものである。

最後に、この教育論はキャリア教育の根底となる人間観を最初に明確にすることから始まっているが、この人間観について、「大教授学」を著したコメニウスそして幼児教育の大家として知られるフレーベルそして最後に教育界の巨星ペスタロッチの人間観をベースにして本来の教育の目的を探求している。

加えて、本学の建学の精神における人間観との一致点を考察している。

本学の建学の精神に基く教育哲学の本源となっている、神道（神ながらの道）の人間観と如何に一致しているかを示すためである。これによって、本学及び神道的人間観に基く教育と言うものの普遍性を証明するためでもある。

教育は何よりも人間観から出発しなければならないであろう。その人間観が「人間とは動物の一種で、その本質は動物的本能である」という様な唯物人間観であるならば、その人間の基本的な人権は動物としての本性を全うすることとなり、基本的な人権を尊重するわが国の教育の目的も動物としての唯物的本性を引き出す（educate）こととなるであろう。

これを、人間の教育と呼ぶことは、人間および教育というものを侮辱することになると考えるのは決して私だけではないであろう。

コメニウス・フレーベル・ペスタロッチの人間観の根底には共通するものがある。しかも神への畏敬の念が強烈であることも同様である。教育の根底には、やはり、この世界における至高・絶対のものを前提とすることなくして、教育理論は成立しないことを物語っているのではないかと思われる。

ただし、科学的教育法を唱えたマリア・モンテッソーリはその教育法において神なる概念を使用してはいない。しかし、あらゆる箇所で、その子供に内在する自然の法則を「生命の法則」として表現しており、その生命を支配している法則を基礎にし、その生命の働きを援助することが教育の使命と考えているのである。

この「生命」を「神」という表現に置き換えれば、それはそのまま幼児教育の創始者であるフレーベルの人間観・教育法と同じものとなる。モンテッソーリの「生命の教育」については改めて別の論文で明らかにしたい。

神道においてもその人間観は「人間は神のわけ^{みたま}御霊」と捉え、神聖なものとしている。本学の建学の精神における人間観もこの神道の人間観を基底において「人間神の子・神の宮」としている。

ところで現代の学問的な分野におけるあらゆる人間観が、性善説的なものばかりではないという事も付け加えておく必要がある。

フロイドの精神分析学は、性的欲求の本源の力であるリビドーを中心にして人間のあらゆる言動や人間の文化を説明し、人間の本性に対する性悪観が強いのが特色である。彼の理論は人間における性的な性質に傾きがちなきらいはあるが、しかし、無意識の世界の分析によって神経症的患者の治癒に多大な貢献をなしているだけでなく、その人間の性欲を中心とする欲望が、人間の精神の正常な発現を歪め、あらゆる問題行動の原因になっているという分析は、教育上にも注意しなければならない多くの示唆を与えているのは事実である。

また、同じく精神分析学者であるカール・メニンジャーは「おのれに背くもの」の著書の中で、人間の行動の原点に、「愛と憎しみ」を置いており、人間が通常求めるものと思われている向上心や成功への願望は、決してすべての者に該当するものではないことを述べている。

マズローの欲求段階説では、すべての人間が最後の欲求段階では自己実現を目指すものであるとしている点で性善説的であるが、メニンジャーによれば人間の潜在意識の中には失敗を企む心が形成されることがあり、その失敗そのものは、自己破壊（処罰）的行動との結果として出てくるものであるという分析を行っている。これも、子供の教育やキャリア教育を考える上で多くの示唆を与えるものである。

このように、精神分析学が証明した識閥下の錯綜したコンプレックスが原因でいろいろな人間の失錯行動や神経症的性格が形成されるという事実は、教育上においても重要な指摘となる。

しかし、それでも、そのような表面の言動は、決して人間の本性ではなく、歪められた感情であり、人間が自らのありのままの姿をそのまま受け入れることができる環境にあれば、人間の本質は本来主体的建設的であり、他との柔軟な協調的な人間関係を築くことのできるというきわめて性善説的な人間観を主張する C.R. ロジャーズのカウンセリング理論もある。ロジャーズに関しては、平成 22 年度の東筑紫短大の研究紀要論文に詳述したので参考にして頂ければと思う。

いずれにしても、人間の成功（人間の魂の成長と使命の遂行という意味での）を実現させる教育もしくはキャリア教育においては、そのような精神分析学が明らかにしたコンプレックスを如何に消却させるかも教育上問われるところであり、そのためにも、今から展開する著名な教育者達の間観が何よりも重要となってくるのである。人間のコンプレックスの根底には自分自身の人間としての本質における劣等意識が存在するからである。

結論から言えば、種々のコンプレックスを消滅させ、自らの人生を力強く切り開いていくことができるかどうかは、ひとえに深き自己信頼の心を構築ができるかどうかにかかっているといっても過言ではない。

どのようにしたら、子供たちに如何に深き自己信頼の念（思い）を深く潜在意識の底にまで刻み込ませるかが、教育の鼎の^{かなえ}軽重^{けいちよう}となるのであり、人生において仕事を通じて成功と幸福を得、そしてその結果社会人類に貢献することにつながるキャリア教育の原点ともなるのである。

第1章 M.モンテッソーリの生命の解放の教育

(1) キャリア教育推進の背景にある社会経済構造の変化

現代は、「高度情報化社会」と言われ、又、知的所有権をめぐる争いに見られるように「知識社会」とも言われている。更に、従来の経済社会に見られない大きな特徴は、

国境を越えて（ボーダーレス化）、ヒト・モノ・カネそして情報が行き来しているグローバル化した人類社会を現出しているということである。

しかし、これは、誰もが認識している事実であるが、こと教育に関しては、この世界的規模の変化が教育というものにどのように影響を与えているかという分析は、あまり見受けられないようである。

但し、グローバル化した社会に適応するために、語学と情報機器の開発および操作に精通する事を目的とした教育は、わが国でも、既に提唱され実際に推進されている。

これらの社会構造の変化の大きな特徴は、実は、別のところにある。それは、人類における仕事の更なる分業化の加速であり、それに伴う、仕事及び産業構造の高度化・専門化そして細分化である。この産業構造の高度化は、世界的規模における国家間の役割の分業化の変革も促している。

しかし、この事実もある程度、周知の事実であろう。問題は、これがどのように教育に影響しているかということである。

このような経済社会において、人間の仕事というものが、あまりにも高度化・専門化・細分化したが故に、学校教育の段階で子供に仕事というものを理解させることが、ほとんど困難な状況になってきたということである。それに伴って、子供たちの学習が、実際の仕事及び職業から乖離してきたということである。

それは、学習の内容だけでなく、学習の目標も現実から離れてきたということも言える。その現実との乖離の中で学習そのものが自己目的化してきているのである。その結果、子供達は、そもそも何のために勉強しているのかわからないまま、多くの子どもたちが落ちこぼれていっているのが現実である。

そういう教育の現状の中で、子どもたちが、将来の社会における仕事に対する意義や価値を理解するのは難しいといえる。

更に問題は、人間の本質であるマズローの言うところの自己実現の欲求を、どこでどのように求めたらよいかわからなくなっているということである。

スポーツや身近な職業に関しては、分かり易いのは当然であるが、より高度化・専門化した職業に関しては、ほとんどわからない状況となってきている。そして、その専門化した職業の中でも更に一段と細分化・分業化が進んでいる。

また、教育が現実の仕事と乖離している背景には、学歴社会の進行もある。1950年代の大学進学率は10%前後であったが、現在は56%に増大している。ちなみにアメリカや韓国は60%を超え、OECD平均でもわが国を上回っている。このように高等教育を受ける学生が増大している中で、明確な職業および人生への指針を構築できない学生も増大してきているといえる。社会におけるニートやフリーターが象徴的存在といえる。これに輪をかけているのが、偏差値で大学の進学先を決める風潮である。

現在、キャリア教育が小学校から大学まで奨励されている背景には、更に経済界の事情もある。それは、わが国における雇用慣行の大きな変化である。一つは、年功序列賃金と終身雇用制度（期間の定めのない雇用形態）の崩壊である。契約社員も含め

て、期間の定めのある雇用の形態が増加しているのがそれである。これが何を意味するかというと、時間と費用をかけて新入社員を育て上げていくシステムが、多くの企業でなくなりつつあるということである。

このような社会的背景の中で、人間は、どこで、そしてどのような形で自己実現ができるのであろうか。人間の仕事が、たとえそれが、より専門化したものであっても、小さな小さな歯車でしかなく、少年が大志や理想をどこに求めてよいのか、分からなくなってきたとも言えるのである。先進各国においても、それが共通の実態である。

まさに、そこにこそ、先進各国において共通にキャリア教育が、提唱されてきた、そして推進されている理由がある。

キャリア教育は単なる職業教育ではないと言われている所以であるが、問題は、学生や生徒の生涯にわたる希望や夢そして志を、どのように実際社会の職業と結びつけ、それが、どのように人間の自己実現へと結びつける事ができるのかという問題である。

更に、その自己実現が、単なる自己中心的な自己満足に終わるのではなく、真の人類社会の進歩発展につなげることができるかということである。一部のエリートだけでなく、多くの有意の青年を教育によって世に送り出すことができるかという問題である。

今までのような、偏差値の向上と大企業を目指すエリート志向的な進学教育だけでは、もはや、限界が生じているのである。既に、グローバル化した企業における採用は、日本人学生より、留学生のほうが多くなってきているという状況もある。

グローバル化した人類社会に適応するための外国語の更なる習得や、グローバル化の中で勝ち抜いていく意識を持たせるために、秋入学なども提唱されてきているが、それだけでは、わが国の教育の真の再生は難しいと思われる。

以上見てきたように、キャリア教育の推進に当たっては、教育の原点から見直す必要があると考えるのである。

学生・生徒の生涯にわたる自己実現を如何にすれば、学校教育の中で支援することができるか。その精神的土台を築かせることができるのか。そして、その結果、人類社会の進歩発展に、学校教育が如何に寄与・貢献することができるかということ、今回は、革命的幼児教育理論を展開し且つ実践して、世界中にその名を馳せたマリア・モンテッソーリの科学的教育学の前提となっている人間観・教育観を中心に論じていきたい。

(2) マリア・モンテッソーリの科学的教育学

キャリア教育が目指す人間性は、言葉は異なる（文科省「生きる力」、経済産業省「社会人基礎力」、厚生労働省「就業力」、内閣府「人間力」）けれど、その内容には共通のものがある。

それは、主として、人間の主体性であり、熱意（熱中性・積極性・計画性・柔軟性・実行力などとして現れるであろう熱意）。そして、人間関係力（コミュニケーション形成力）である。

これらは、大学だけでなく、小学校から高校までの学校教育の中で形成発展させるべき、キャリア教育の内容として論じられているが、このような人間力は、人間の本性として既に内在しているものであり、教育によって作り上げるものではなく、教育によって引き出すものであるという事を、まずは認識する事が重要である。

しかも、その人間に内在する本性は、既に幼児の段階で、その萌芽が見られるものであり、その幼児の生命を如何に引き出し、そして、その生命の発動を如何に援助するかが幼児教育の眼目であるということを科学的に実証したのが、マリア・モンテッソーリであった。

元々医者であったモンテッソーリが、障害児の治療においてセガンの理論及び治験例を適用して成果を上げていったことをきっかけにして、障害児教育から健常児への教育へと軸足を移していき、モンテッソーリ・メソッドや科学的教育学として、従来の教育法から見れば、革命的な教育の地歩を築いていったことは、世界周知の事実である。

モンテッソーリは、極めて医学的・科学的な見地から、特に幼児における、教具を使った教育法を開発していったのであるが、モンテッソーリの科学的教育学と称する一見機械的・人工的と思われる教育法の背後には、教育者の実に深い愛と、子供を一個の人間として深く尊敬するところが根底にあったことを理解する必要がある。

彼女の文章からもそれは伺うことができる。「子どもの発見」から引用しよう。

「私たちが科学者と呼ぶのは、実験によって生命の深いところにある真実を研究し、その魅力的な秘密の何らかのベールをはぐように導く手段を感じた人のことです。またそのような研究において、自然の秘密に対するわれを忘れるような情熱的な愛がみずからの内に生まれるのを感じた人も科学者と呼びます。」¹

モンテッソーリが、自然の秘密という表現を用いている事に注意しなければならない。幼児の中に眠る（内在する）人間の生命的働きを、先ず科学者の眼を持って認識し、そしてその神秘のベールをはぐことに情熱的な愛を捧げるものが、真の科学者であり、教育者であるとするのである。

そして、教師は子供を通して、その生命の神秘に触れ、学び、そこから逆に教師自らが自己完成するものであるとモンテッソーリは語るのである。少し長くなるが、更に引用を続ける。

「弟子の一人は、天国において偉大なる人になれるのは一体どのような人か考えました。そして、純然たる好奇心からキリストに尋ねました。

『主よ、天国において、すべての人のなかでもっとも偉大な人とはどういう人でしょうか？』キリストは自分をうっとり見つめている小さい子供の顔をなでながら答えました。

『この幼子のようなものである。その者が天国でもっとも偉大な者になろう』

では、熱烈で神秘的な魂の持ち主を想像してみましよう。その人の魂には、敬意と愛と神聖な好奇心、そして神の国の至高の気高さへの憧れが入り混じっています。その人はそのような魂を持ちつつ、自分自身を完成させる方法を学ぶために、小さい子供の生命のすべての表れを観察するでしょう。その人を子供たちであふれている教室のただ中に置いたと想像しましょう。

その人は、私たちが育てたいと望む、新しい教師ではありません。

私たちが求めるのは、一人の人間の魂に科学者の厳しい献身の精神と神秘主義者の口では言い表せない無我の境地の精神を吹き込むことです。そうすれば私たちは、教師としての精神を完全に身につけさせることになります。

そのような教師は、子供そのものから自分を教育する方法と手段を学ぶでしょう。つまり、教師として自分を完成させることを子供から学ぶでしょう。」²

これが、教師の基本的精神であると考えます。学問研究を主とする大学の教育は、若干異なると考えるが、幼児教育、初等教育から高等教育まで、教育と名づけられるものの基本的精神は、このように幼子のような謙虚な気持ちで、子供たちに内在する生命の偉大な働きを見つめ、尊重し、そこから学ぶことから始まるのである。そのとき教師は無我の境地に立つことになる。教師としての仕事を通じて自己を完成させる道である。

心理学者ロジャーズのカウンセリングの目指した、クライアントとセラピストが一体となったときの無我の法悦の境地と同じものである。

そして、その上で、教育者は何をしなければならないのかを、モンテッソーリは次のように語っている。

「抑圧されている生命を解放することです。生命が肉体的にも精神的にも調和を保ちつつ発達するのをじゃまする数知れない障害物から生命を解放することです。この最も重要な事実が今日までずっと、観察者の大集団の眼に入らないできたのです！」³

モンテッソーリの言うところの生命の解放とは、どのようなものであろうか。そして、その子供の抑圧されている生命を解放する科学的教育学とは如何なるものであろうか。順次、モンテッソーリ自身の言葉で見えていくことにする。

「小さい子供の教師たちも同じように、遊びやしぼしばおどけたおしゃべりによって、子供のレベルに合わせようとするのが子供たちを教育することだと信じています。

そうではないのです。必要なのは、子供の生命の原動力である魂の内部でうとうとしている人間を、いかにして呼び覚ますかということなのです。

私は直感的にこのことを理解しました。そして、子供を目覚めさせ、教具を使うように仕向けて自分自身を教育させるのは教具ではなく、彼らに呼びかける私のこの声だと信じました。私を導いたのは、障害のある子供たちの不運に対する大きな敬意と、

彼らが自分たちに接する人間誰にでも自覚めさせることのできる愛でした。(傍点中村)」⁴

教師の障害者に対する敬意と、そして彼らに接する人間の内部に目覚めさせる愛が、彼らの魂の内部にある本来の人間が持っているところのもの（この内容は後述する）を呼び覚ますのである。これが、モンテッソーリの唱える[生命の解放の教育]であり、[魂の教育]である。更に引用を続ける。

「教師は活力のないもろい魂を引きつけて、生きていくことはすばらしいと感じさせなければならぬからです。

これは精神に作用する秘密の鍵のようなものです。セガンによって見事に分析され、知的障害児の教育で現実に最も効果を挙げた、一連の長い教育的な実験への扉を開きました。」⁵

人がこの世に生を受け、最初の段階で、生きていくことはすばらしいと感じさせることが真の教育であるとするならば、人間の教育とはなんと偉大なことであろうか。しかも、人間の愛を引き出すのは、教師自身ではない。障害者であり子供である。教育の対象者である子供たちや障害児こそが教師の愛と尊敬を引き出すのである。

仏教における観世音菩薩かんぜおんぼくさつの働きは、相手に応じて姿を変えて（三十三身に身を転じて）その相手を済度きいど（救う・導く）すると言われている。

仏教的に表現すれば、子供こそが、人間の愛を引き出し、そしてその人間を救うところの観世音菩薩となる。観世音菩薩は身を障害者として現し、子供となって現れ親や教師を済度するのである。

教育もここまでくれば、人間における体験のすべてが、自らの魂を成長させる為の教師となる。

教育するものと教育されるものとが一体となる世界、救うものと救われるものとが一体となる世界、これが、モンテッソーリの唱える[生命の解放の教育]の真髄である。

「励ましか慰めとか愛とか尊敬とか呼ばれるものは、人間の魂を動かす原動力です。この意味で多くをあたえる人は、自分の周囲の生命を更新し回復させる人です。

そのような内面的な力のともなわない外面的な刺激は、いかに完全なものであっても気づかれず見過ごされます。」⁶

すべての親や教師そして、先に生まれてきた者たちが、後進に対して持たなければならぬ最初のそして最後の精神である。

このような尊敬と愛の教育的環境の中で、もし人間が育まれることなく、逆に不信と強制とそして軽蔑の中で育まれる事になると、心理学者マズローの分析した人間の基本的欲求（生存・安全・所属・尊敬・愛）が満たされないことになる。マズローは、この欲求が満たされないところからあらゆる神経症的病気が生じるとしている。

私自身の教育経験（不登校児・非行児・家庭内暴力・校内暴力などの子供の問題行動）からも、それは立証することができる。

このマズローの「欲求段階説」における最後の段階として、人間が本来、誰でも持っている自己実現欲求は、モンテッソーリの幼児教育の段階で既に現れるものであることが推察できる。マズローの理論に関しては後述する。

ところで、この自己実現こそが、今現在、わが国のみならず先進各国で提唱されているキャリア教育の中心的課題である。真の人間の熱意と主体性そしてコミュニケーションを伴った実行力、これらをいかにすれば育成できるかによって、キャリア教育の鼎の軽重が問われているのである。

人間の熱意や主体性の背後には、必ずこの自己実現の内在的欲求があるからである。

キャリア形成において重要な要素である、主体性・熱意そしてコミュニケーション能力を伴った実行力などの精神的基盤を作る教育を、このモンテッソーリの科学的教育学—生命の開放の教育—の中に見るのである。そして、そこにその精神を育む教育者のあるべき基本的精神が語られているのである。

そういう意味において、「キャリア教育は、本来の教育の原点に戻る事である」と、私が唱え続けている理由がある。

モンテッソーリの言葉に戻ることにする。

「教師が特別な訓練において従わなければならない原則は、ペスタロッチが自分の学校に対して果たした独自の貢献に由来します。その原則は教師の心を打ちます。それは、ただ知的な勉強だけでこと足りるものではありません。教育とは基本的には『魂の触れ合い』であり、教師は自分が教える子供に対して『尊敬と共感』を持たなければならないとするものです。いずれにしてもこの事は、子供の精神を目覚めさせるという目的に不可欠な最初の一步に過ぎません。その次に子供の活動力は、成長に導く手段（この場合は科学的な手段）を見いださなければなりません。この2番目の部分に、科学的教育学が寄与します。」⁷

私が、今回の論文でキャリア教育との関係で、特に強調したいのは、そのモンテッソーリの具体的な道具を使った教育方法ではなく、子どもの教育に携わる人間の基本的精神である。そして、教育とはそもそも何なのかという、その教育の根本である。

キャリア教育は、教育の目的と教師の基本的精神という本来の教育の根本から見直し、そして、その本来の教育の原点に立ち返る事から再出発しなければならないと考えるからである。

モンテッソーリが、新生児というものを、そして人間というものをどのように捉え認識しているかという事が、最も重要である。その人間観によって教育方法論も大きく違って来るからである。

モンテッソーリの「子供の精神—吸収する精神—」から次に引用する。

「子どもを生後1年目から研究してきた、何人かの心理学者の報告について考えてみましょう。どのようなことが推論できるでしょう？」

分かることは、一人ひとりの子供の成長は、成り行きに任せる代わりに、より良い配慮によって科学的に指導されるべきであり、そうすることによって、子どもはより

良く発達する事ができる、ということです。すべての心理学者が一致している考えは、子どもは配慮と援助を受ければ受けるほど、よりたくましくて精神的にもより平衡の取れた、より堅固な性格を持った子どもに育つようになっているというものです。別の言い方をすれば、結論的な考えは、子どもは肉体的な衛生学のほかに、精神的な衛生学によっても守られなければならないということです。」⁸

この教育の根底には、人間尊重の哲学がなければならない。人間の本性に対する深い尊敬の念に基づく愛である。この人間尊重の哲学は、モンテッソーリのみならず、「大教授学」を著したコメニウス、幼児教育の先駆者であるフレーベルそして教育学の実践者にして教育の世界に不滅の光を与え続けているペスタロッチなどの教育者、そして、カウンセリングのロジャースの来談者中心療法、更には、経営学の分野では、マズローそして X 理論・Y 理論で有名なマグレガーなどに共通する哲学である。

この人間尊重の哲学については、私の研究論文である「キャリア教育方法論(1)―C. R. ロジャースのカウンセリング理論を中心に―」（平成 22 年度東筑紫短期大学研究紀要）と「キャリア教育方法論(2)―組織心理学を中心に―」（平成 23 年度東筑紫短期大学研究紀要）更に「キャリア教育論(1)―キャリア教育の根底にある人間観を中心に―」（平成 22 年度九州栄養福祉大学研究紀要）において詳述したので参照頂きたい。

(3) モンテッソーリ教育における教育観

モンテッソーリ教育の特色は、子供に内在する完全なるものを認めているということと、子供の成長は、子供自らが成し遂げていくものであり、大人の教育によって子供は人間に成長するのではないということである。

「人々は、母親が子供を育て、しゃべったり歩いたりするのを教えるなどといってきました。

今や、これらすべては母親の仕事ではまったくなくなり、子供が獲得するものになりました。母親が生み出すのは新生児ですが、人間を生み出すのは新生児なのです。母親が死んだとしても、子供は変わりなく成長し、人間の建設という仕事をなしとげます。」⁹

子供は、自分を取り巻いている環境から言葉や風習などを吸収し、自分自身で将来の大人としての人間を形成するとするのである。

それでは、モンテッソーリのいう教育とはどのようなものであろうか。更に引用を続ける。

「人間の正確さ (normalita) の建設は保護されるべきです。私たちは、子どもの発達の道から障害物を取り除き、子どもを取り巻く危険や無理解を遠ざける為に、すべての努力を傾けたのではなかったでしょうか？

これが、生命への援助としての教育です。誕生時からの教育であり、いかなる暴力も伴わない革命を準備する教育です。すべての人々を共通の目的のために結びつけ、

唯一の中心に向かって引きつける教育です。母親たちも父親たちも政治家たちも、すべての人々が同意するでしょう。子どもが自分の内部の教師の指導のもとに、神秘的な精神状態において念入りに仕上げる、このデリケートな建設作業を尊重し援助することに。

これは人類の新しく輝かしい希望です。再建ではありません。人間の魂が目的を達成するよう呼びかけられた建設への援助です。人類の息子である子どもが授けられている計り知れない潜在能力のすべてを発達させることだと考えられる建設への援助です。」¹⁰

子供が、自らのうちに念入りに建設していく神秘的な人間確立への過程を尊敬し、その働きを援助する事が、教育であるとするのである。

注意しなければならないのは、子どもを大人の基準で型にはまったものにするのではないということである。子供の人生のルールを敷くものではないのである。むしろ、このような強制的な教育によって、子どもの精神は歪められ、将来の人間への形成が困難となるのである。あらゆる問題行動を起こす子どもの根本因ともなるのである。

このモンテッソーリの科学的教育学は、「生命の解放の教育」「魂の教育」等と名づけることもできるであろう。

同時に教育者も援助という形で、子供を尊重し、その教育に携わることによって、自らの人間の完成も成就することになる。前述したように子どもは、子どもの姿をもって親や教師を導き高める観世音菩薩である。

導くものも導かれるものも、教育するものも教育されるものも、本来一体（自他一体）の関係こそが人間の本性であると解釈することもできる。これがモンテッソーリ教育観の内容である。

(4) モンテッソーリ教育における仕事観

見逃してはならないのは、モンテッソーリの教育の中で、現代のキャリア教育の本質に通じる重要な部分が存在するという点である。

「人間にとって仕事とは何か」ということを考えるに当たって、その人間の本性において仕事を行うところの欲求が内在すると言えるのである。人間が生まれながらにして本能的・生来的に持っているものであるとすると、人間は仕事をする為に生まれ、仕事を通して創造的活動を展開する存在であるということになる。

更にその仕事を通じて人間は、社会を形成する存在でもある。

しかも、人間が本性として本能的に持っている仕事への欲求と熱意は、それを充足させればさせるほど、人間の満足感は高まっていくことになる。それは、人間の本性から生み出されるものであるからである。人間の本性から生み出される労働は、本来きついものではなく、魅力あふれた何にもかけがえのないものとなるのが自然である。

人間の本性から生み出される仕事が、その自然の発露として展開することなく、強制や義務、更には、生活費を稼ぐ為だけの労働となることによって、仕事はきついものとなるであろう。

モンテッソーリは、その仕事（幼児においては「作業」であるが）と人間の間を次のように捉えている。「幼児の秘密」より少し長くなるが、以下に引用する。

「子どもによって明らかにされた事実のなかには、本質的なものが含まれています。作業つまり仕事によって本来の正常な状態に戻る現象です。私たちは、世界のすべての民族の子どもたちについてなされた数知れない経験によって、心理学と教育の分野においてこれまでに実証されたことよりも、ずっと確かな経験となる現象を示すことができます。

確かなことは、子どもにとっては、仕事をするという性向が、生命に必要な本能を意味することです。仕事をしなければ、自分の人格を秩序立てることができないからです。たとえその人格が、自分固有の正常な範囲を逸脱して築かれるとしてもです。『人間は仕事をすることによって自分を築きます』。仕事の不足に代わるものは何もありません。裕福さも愛情も仕事の代わりにはなりません。逆にいえば、さまざまな『逸脱』は、罰や手本によっては克服できません。

人間は仕事をする、実際に手を使う仕事をするによって自分を築きます。そのとき手は、人格の道具、それぞれの人間の知性と意志の器官となり、環境に正面から向き合う、独自の存在としての人間を築きます。子どもたちの本能は、仕事することが人間の性質に固有の傾向であり、ヒトという種に特有の本能であることを明らかにしてくれます。」¹¹

モンテッソーリにおける援助とは、何もしないで、ただ幼児を放任しているのではない。人間が本来持っている仕事への精神的性向を、環境を整えること（モンテッソーリの場合道具などを準備すること）で引き出すことである。それによって子どもは、自分自身を築き人間となるのである。

重要なのは、「人間は生まれながらに仕事への精神的性向を持っている」ということである。私は、別の論文「キャリア教育の経営学的考察—大学組織を中心とした組織論的考察—」で人間は、組織を形成し、他と協働する性向を生まれながらに持っているということを論じた。そういう意味で、人間は本来自他一体であるだけでなく、組織とも一体である存在だと論じたのであるが、モンテッソーリの論を加えると、人間は更に仕事をする為に生まれた存在であり、仕事と人間は本来一体の存在でもあるということになる。

自分と他、そして組織とも仕事とも本来一体の存在であるということは、十分肯けるものである。人間は必ず協働することと組織に所属（大きくは国家社会）すること、そしてその組織において必ず人間は仕事をしているということは事実である。

そして、その人間の仕事を通じて人類社会は進歩し発展してきたのも事実である。勤勉と労働を通じて神の栄光を顕すというプロテスタントの倫理が、資本主義の発展

を促したとするマックス・ウェーバーの「プロテスタントの倫理と資本主義の精神」があるが、これも一つの論証となるであろう。

人間は、その本性において、仕事と組織への一体化・自他の一体化の性向を持っているからこそ、マズローが分析し指摘したように、人間は生存・安全欲求だけでなく、所属・尊敬・愛というような、組織と他者がなくしては得ることができない基本的欲求を生来的に持つことになるのであると考えることができるのである。

更に、マズローのいう、それらの基本的欲求とともに、内なる完全性を追及する人間の志向（自己実現欲求）も持つことになるのである。

組織（企業組織・社会組織・国家組織など）における仕事を通じて、人間は自己実現が可能となるのである。

しかし、人間が、そのような仕事観をみな持っているわけではない。むしろ、仕事は生計を得る為にやむを得ずしているものであり、楽しいどころか、ストレスは溜り、むしろ苦痛であるという風を感じる人間も多いのは事実である。それは、学校での勉強も同様である。強いられて義務的に行うのは苦痛が伴うものであることは、人間はみな経験から知っていることである。そこから、勉強嫌いの子ども達が生じることにもなる。

人間が本来持っている性質の中で、熱意や主体性そして積極性などは、他から強制されると、いくら本性として内在しているものであっても、意欲がそがれるものであるということは、誰しもが経験していることであろう。それは、人間の創造性の根源に「自由」であるという本性も併せ持っているからに他ならない。

モンテッソーリは、その人間に内在する、本能的な仕事への欲求を如何に自然に育むかということを教育の最大の眼目としたのである。

モンテッソーリの仕事観について更に続けることにする。

「仕事はこの上ない満足にあたえ、健康と（子どもたちにとっては）再生の大事な基礎となるべきものです。それなのになぜ、大人は仕事を拒否するのでしょうか？大人は環境が要請する厳しい必要性を決して信じようとはしないのです。というのは、仕事をする事についての社会の考え方が誤った基礎の上に立っているからです。仕事に対する本来の本能は一所有欲や権力欲や偽善や独占欲にゆがめられて一劣った特性であるかのように見なされて、人間の内部に隠されたままになっているからです。このような状況にあっては、仕事をするか否かは、外部の事情あるいは墮落した人間の闘争によってのみ決められます。そして仕事は強制された労働となり、そのことが強い『精神的障害』を生み出します。そのために、仕事は厳しくて嫌悪を起させるものになるのです。」¹²

マズロー流に言えば、仕事は本来自己実現へ向けて志向されるべきものであり、そこに人間の本性に導かれた、真の満足感・充実感が生じるものである。

その仕事が、人間の別の欲望、即ち権力欲や所有欲（金銭欲なども含むであろう）さらには名誉欲など、人間が、本来、仕事に対して持つところの自己実現・自己完成

(マズローは、真の自己実現を達成している人間は、自他一体の感情が深く自己実現と他者実現の志向が共に強いことを実証している) へ向けての成長に向かう動機(欲求)ではない、利己的・自己中心的(排他的)・自己満足的動機(欲望)によって、労働そのものの神聖性が歪められ、劣った特性として、一般の人間に認識されてしまったと捉えているのである。

権力欲や所有欲から仕事を求める人間は、仕事はそれらの欲望を実現する為の手段となるが故に、仕事そのものと人間は分離することになる。人間に内在する本性からの仕事への自然の欲求で行う者は、仕事は、仕事をなすことそれ自体の中に充実感があるが故に、仕事とその人間は一体となる。「あんじょうひと鞍上人なくあんかうま鞍下馬なし」という人馬一体の境地である。

モンテッソーリは、そのような、仕事と人間が分離しないための教育論を展開したのである。そして、仕事そのものへの性向・欲求が人間の本性である、ということが幼児の行動からわかってきたのである。

仕事そのものが人間の本性であるならば、仕事及び生涯を通じて自己実現を目指すキャリア教育の方法論は、人間の本来の性質・性向を歪めずに如何に援助・教育するかが最大の問題となるのであるが、しかし、その前提として、人間の本性における仕事への性向を見なし全的欲求としてもって生まれてきたのであるということを確認することから出発しなければならない。

更に続きを引用する。

「しかし例外的な事情のもとでは、仕事は内面的な本能の衝動と結びつきます。そうなれば仕事は、大人に対してさえまったく異なった性質を持つようになり、それをせずにはいられない魅力的なものになって、多くの人間に逸脱や混乱を乗り越えさせます。そのような仕事とはたとえば、何かを発明する人、大地の探検のために英雄的な努力ぶりを発揮する人、芸術作品の製作に従事する人などの仕事のことです。このような場合には、人間は特別な力によって支配されます。そのために人間は、自分独自の意図を実現しようとして、ヒトという種の本能を改めて見いだします。そうなるとその人の独自性は、地面から力強く噴出す水のようなものになります。それは表面の厳しさのからを粉々に砕いて、猛烈な勢いで空にそびえ立ったあと、さわやかさをもたらす有益な雨となって人類に降り注ぎます。

そのような衝動は文明の進歩を生み出します。それらの衝動のおかげで、人間社会という環境の根拠になっている、仕事をするという本来の本能の基本的な特徴がよみがえります。仕事をするということは、疑いもなく、人間の特性たるものです。文明の進歩は、暮らしやすい環境を創り出そうとする、人間のさまざまな能力と関連しています。」¹³

人間の創造性は人間本来の本性から生まれるものであるから、一旦それが現れると、まさに天(モンテッソーリはこれを自然と常に表現している)がバックアップをして迸り出るといっているのである。

そのとき、人間はあらゆる困難を粉々に打ち砕き、その結果人類への恩恵となって降り注ぐというのである。まさにキャリア教育というより教育本来の目的である。

人間の本性に基づく仕事を通じた自己実現が、人類社会の進歩発展への貢献となって人類に降り注いでいくこと、これが人間の教育の共通の目的である。

この教育の原点が見失われてきたところに、現在先進各国でキャリア教育が提唱されなければならない理由が存するのである。キャリア教育の推進は、教育本来の目的の原点に返ることであり、そういう意味での一大教育改革である。

そのためには、やはり人間の本性に対する観方、それも人間に内在せる無限の可能性、そして、完全性や自己実現を目指す人間の志向性・成長性への把握と、その上での人間の尊重を前提とする教育の原点、更に、教育の本来の目的の原点に帰らなければならないのである。

しかし、前述のモンテッソーリの内容で、一点、付け加えなければならないと思われる点がある。それは、人間の内面の仕事への本能的衝動に導かれたケースとして、発明家・英雄・芸術家等をモンテッソーリは挙げているが、こういう人々はもちろん当然であるが、更に次のような人も含なければならない。

それは、あらゆる組織の一員として、その組織の目的と一体となって、分業化された役割の中で、地味ではあるが、他との協働の中で、常に改善を心がけ、心には、国家社会人類に奉仕する（人類社会の進歩発展に貢献する）思いで、与えられた仕事に全身全霊で愛をこめて取り組む、あらゆる階層の人々である。

そのような人々もまた自己完成へ向かって自己実現している人たちである。何故なら、人間の本性には、仕事との一体感だけでなく、人々と協働し、人のお役に立ち、組織と一体となってその目標を実現する本性が内在するからである。そして、その組織を通じて社会の発展に寄与貢献する存在であるからである。

人間はその本性から発露してきたもの（ただし、権力欲や名誉欲・金銭欲などの、後から環境によって歪められた自己中心的・自己満足的な欲望ではなく、人類社会に貢献するところの人類の共通目的に合致した本性・欲求）は、必ず人間に満足感と充実感を与えるからである。

しかし、そのような、歪められた自己中心的な欲望の奥には、やはり、他者実現的な社会の発展に真に寄与しうるところの、本来的な自然の欲求が存在しているのである。

仏教では、それを「煩惱ぼんのう即菩提ぼだい」といている。煩惱の奥に悟りの世界があるとするのである。煩惱を断ぜずして煩惱おのずから清まるとしている。

これは、ロジャーズカウンセリングにおける「受容」の心とも一致する。「受容」や「無条件の絶対的尊重」更に「共感的理解」というものは、あらゆる人間の感情（悪なるものも善なるものも含めて）を、無条件にそのまま受け入れることによって、人間に内在する本来的な主体性や積極性そして人間関係における協調性などをクライエント自身の中から現すことである。

これらに共通しているのは、モンテッソーリと同様に、人間性の本質（本性）に対する深い尊重の心がある。

モンテッソーリが「幼児の秘密」と言い、「子どもの発見」といったのは、この人間の本能的に自然に内在する、仕事との一体性、そして人間の完全性・創造性への志向（成長性）そして、大人及び教師の愛を引き出し、自ら人間となっていく、その存在の神秘性の扉を開いて、人間そのものの尊厳性を発見したからである。

精神分析学のフロイドは、人間の本性の中で、特に人間の生存本能と一体となった肉体本能的な食欲や性欲の中でも、性欲をリビドーとして取り上げ、このリビドーの歪められた精神が神経症を引き起こすとした汎性欲説的な人間観ではあるが、モンテッソーリのように人間尊重を前提とする人間観に基く心理学・教育学を展開した人々は、人間のあくまで精神的に内在する善なる性向（仕事への意欲・成長および向上への性向・主体性・積極性など）に焦点を合わせているという特徴がある。

本来教育は、人間のその精神的に内在するところの善なる本性に基づくことで、善なる精神的性向（本性）を引き出し、そして、人類社会の進歩発展に貢献させねばならないという使命があると考えるのである。

ところで、モンテッソーリ・メソッド（科学的教育学—モンテッソーリ・メソッド—）は、あくまで、このモンテッソーリの善なる精神的性向を尊重する人間観・教育観を前提にして初めて、その威力を発揮するのである。

その人間の善なる本性からの働きは、宇宙・自然の働きと合致し調和するものであるということ、当然であろう。この間の消息を更に続けて彼女の文章から引用する。

「子どもの持っている、仕事をするという本能の力ならびに正常さと仕事との密接な結びつきが、人格の形成すべてに及ぼす影響を点検するのは興味あることです。

その結果は、人間が仕事ということに凝縮されている目的を持って生まれてくるという事実の、この上ない証拠になります。というのは、自分が自由にできて、自分の存在ならびに創造の目的に合致している何かを人間に作らせるのは自然だからです。そして、命あるものすべてが、それぞれの種に授かった本能の働きに従って創り出している宇宙的な調和を人間が共有しないと考えるならば、それは不合理以外の何ものでもありません。」¹⁴

自然とは、それはモンテッソーリにおいては、宇宙的な天地万物の調和をもたらすものであり、その中でも人間には、自由にその創造的働き（仕事）をするという目的を与える存在である。

いずれにしても、モンテッソーリの唱えた、幼児教育を中心とする科学的教育学の前提となる人間観・教育観が、現代のキャリア教育にとっていかに重要であるかということである。

現在のキャリア教育が求める人間力は、何度もあらゆる論文で書いてきたが、もう一度まとめると、仕事において最も要求されるものは、熱意・主体性・創造力・実行

力・責任感そして人間関係形成力（組織におけるコミュニケーション能力）やストレス耐性等である。

このような人間力は、心理学者のマズローが、自己実現を達成している人間が持つ共通の特色として書いているものである。しかし、マズローの理論によると、これらの自己実現している人間の段階に達するには、その前段階である欠乏動機に基く、生存及び安全欲求・名声や尊敬を受ける欲求・所属欲求そして愛の欲求（受身的な意味で）という基本的欲求が、過去か現在において満たされていることが必要であるとするのである。

この間の消息を、マズロー自身の言葉で語ってもらう。「人間性の心理学 - モチベーションとパーソナリティ -」より以下引用する。

「欠乏に動機づけられている人々は、他の人が誰か自分に尽くしてくれないと困るのである。というのは、彼らの欲求の主なもの（愛、安全、尊敬、名声、所属）は、他の人間によってのみ満たされるからである。しかし、成長によって動機づけられている人々には、実際には他人は、欲求充足の妨げとなっているかもしれない。彼らにとって、満足やよき生活を規定するものは、いまや内なる個人であって、社会的なものではないのである。彼らは非常に強いので、他の人の良い意見や愛情によってさえも影響を受けない。他の人々の与えてくれる名誉、地位、報酬、人気、名声、愛は彼らにとって自己発展や内的成長ほど重要ではなくなっている。愛や尊敬から独立を保つというところまでに到る最善の手法として、われわれが知っているものは、それが唯一でないにしてもまさにこの愛や尊敬を過去に十分に与えられたことである点を指摘しなければならない。（傍点中村）」¹⁵

モンテッソーリの幼児教育の真髄は、親や教師のあり方（特に子供に対する観方）である。子どもに対する接し方や子どもへの援助のあり方、及びその教育的精神である。

その前により重要なのは、子どもとは、乳幼児とはいかなる存在であるかという認識（人間観）の問題である。

モンテッソーリの科学的教育学・生命の解放の教育法の原点は、今まで詳述してきたが、子どものその本性（成長性・自主性・行動力などを本来内在的に持って生まれてきているという人間の本性）に対する尊敬であり、愛であった。

マズローの唱える自己実現の能力は、その人間誕生の初期の段階で、幼児の教育を誤らなければ、その萌芽をすべて見るのであり得るのである。これが、モンテッソーリの人間観・児童観である。

マズローの言う自己実現はもちろん大人の段階での自己実現であるが、その自己実現の本能（欲求）は、やはり人間生まれながらの本性として、内在していると捉えなければならないであろう。それを、モンテッソーリの教育学の中で見てきたのである。

その幼児の本性を愛と尊敬によって引き出し、更に、それを認め、且つ賞賛することで、マズローの言う人間の基本的欲求を育てていく。特に子どもの時期には、親や

教師という大人によって認められ褒められるということが特に重要である。これが子どもに与えられないとき（基本的欲求が満たされないとき）に、子どもの精神は歪められていくのである。そして、あらゆる子どもの問題行動の原因ともなるのである。

マズローの言う基本的欲求が満たされないときには、同時に、人間は更なる自己実現の成長の道から外れていくのである。

人間の深いところに内在している自他一体の自己実現へ向かって、そして、より専門的に高度な世界へと、同時に深い協働精神や自他を受容できる人間関係の形成力を自らを構築していく世界へと導いていくこと、それが、本来の教育の眼目であり、そして最も正しい意味での、キャリア教育であると信ずるものである。

(5) 最後に

「キャリア教育方法論の新たな視座」は今回の論文で3回目となる。九州栄養福祉大学の研究紀要の論文（キャリア教育に関する）を含めると6本目となる。キャリア教育というものを、多角的総合的に捉えるために今回は、教育学史上、幼児教育理論の革命的意義を持ったマリア・モンテッソーリの科学的教育学の、特に、前提となる人間観・教育観を中心に論述した。

産学官を挙げて取り組んでいるキャリア教育は、その掲げた理念と目標は教育界においても浸透しているが、その理論的体系化に関しては、未だ不十分であると考察される。

私自身、キャリア教育論を、あらゆる視点・角度から論じてはいるが、書けば書くほど、未だ、道遠しの感がある。それは、深く人生と人間の教育、そして仕事と人類の進歩発展及び人間の組織や国家社会との結び付き、更には学問というものの本質論にまでたどり着くような根の深いものであるからである。

しかし、いずれにしても「キャリア教育は幼児教育から始まる」ということを、私自身今回のモンテッソーリの「生命の解放の教育」理論によって改めて痛感している。子どもの仕事への創造性を引き出す幼児教育に失敗すると、マズローのいう自己実現・他者実現は極めて難しいものとなる。この間の消息は、改めて別の論文で論述する予定である。

第2章 コメニウス、フレーベル、ペスタロッチの教育観

(1) コメニウスの「大教授学」における人間観と教育の目的

キリスト教が西欧社会において、多数の国家で国教的存在となり、カトリック・プロテスタント・ギリシャ正教のいかに問わず、一部のイスラム教徒を除いて西欧人共通の信仰にまで広がっているのは周知の事実と思われる。西欧における学問研究の世界においてもキリスト教に深く根ざした、あるいは関係するものは当然ながら多数に上っている。教育学においてもそれは例外ではない。

ルソー・ペスタロッチの先駆者と言われ、「近代教授学の父」と呼ばれるコメニウス (Johannes Amos Comenius) はプロテスタントとしての宗教学者であり、「同一年齢・同一内容での学校教育」を提唱・創始した教育学者である。彼の代表的な著書の冒頭で「あらゆる人に、あらゆる事柄を教授する・普遍的な技法を提示する」と銘打った「大教授学」の最初の第1章は、人間とは如何なる存在かという人間観から書き始めている。

人間とは何かから始まって、深く人間の尊厳を自覚し、人間の本性に対して尊敬の念を持つことが教育の原点であると、彼は考えているからだと思われる。

例えば人間の本性が「悪」なるもの「罪深き」ものであるならば、その人間の教育技法は必然的に、犯罪者を更生させるような矯正的な方法とならざるを得ないであろう。しかし、その子供の行動が、たとえ非行を繰り返すようなものであっても、人間の本性が、中国の孟子が唱えているような本来「善」なるものであり尊き神性を宿すものであるとするならば、現象の悪にとらわれず、その本性を信頼してその善なる本質を如何にして表面に引き出すかという事が、教育法となるであろう。

もともと educate とは「引き出す」という意味であるから、人間の教育とは、本来人間の内なるもの（その本性が如何なるものかは別として）を如何に引き出すかというところからきたものと考えられる。

ところで、教育によって世界の平和の実現が可能であると考えたコメニウスは、人間の本性をどう捉えたのであろうか。

曰く「人間は、被造物のうち最高の・最も完璧な・最も卓越したものであること」¹⁶と。

このように彼は、人間を天地万物の創造主である神の最高傑作として捉えているのであるが、人間を神なる創造主の単なる被造物の中の最高作品と言っているのではないことに注意する必要がある。人間が単なる被造物であるならば、神と人間の関係が、創るものと創られるものとの対立的併存的関係になってしまうからである。コメニウスのいう神と人間の関係は、次の文章でより明らかとなる。

「天から落ちて聖書の中に響きかえっているのは、おお人間よ、われを知れ、汝を知れ、という声でなくてなんでありましょう。われとは永遠と知恵と幸いとの泉であり、なんじとはわが作品、わが似姿、わが喜びである」¹⁷と。このようにコメニウスは、

神（われ）は永遠であり、知恵であり、幸いそのものであって、人間（なんじ）はその神（われ）の似姿であると言っていることである。

神の似姿というのは、人間は、神の本性（神性）をその内部に分ち持つところの、まさしく神の子であると言ってよい。また、それ故、神が永遠であるという事は、神の似姿であるところの人間もまた永遠であると言っていることである。

人間が単なる物質的・肉体的な被造物であるならば、人間が永遠であるはずがないのである。神が目に見えざる霊的存在であるからこそ、その神の霊を分かちもつ人間もまた神が永遠であるように、人間もまた永遠であるのであるとしているのである。

人間を単なる物質的・肉体的存在ではなく、その本質は神性を宿す霊的存在と捉えているといってもよいであろう。

「神の似姿」を別の箇所ですべてのように説明している。

「すべての人間が、事物の知識（Scientia rerum）を獲得する力を生まれつきそなえていることは、明らかであります。なぜなら、第一に、人間は神の似姿（Imago Dei）であるからです。申すまでもなく似姿は、寸分違わぬものならば必ずその原型の特徴（archetypi sui lineamenta）を写しています。さもなければ似姿とはいえますまい。ところで神の特性のうちとくにぬきこんでいるのは全知（Omniscientia）ということです。したがって人間の中には必ず全知の・ある映像が（simulachrum）が映っていることになりましょう」¹⁸

人間のうちに神のその特徴の一つである全知なるものが宿っているということである。全知にして全能なる神の叡智はすでに人間に内在する。人間の知性というものがその教育によって引き出すことが可能なのは、そもそも人間の本来性として神の叡智を宿しているからである。といえる。ただ、それが真の神の叡智にひとしいものとなるためには段階があるということである。

「最後に、なんじに欠けるものがないよう、われは、わが性質をなんじの性質に永遠に結びつけ、人格の絆によって、われをなんじの中においた」¹⁹と。このように人間の内に神ご自身の性質を植え付け結び付けたのである。そして、人間は神の欠けることのない人格を宿す最高の存在として、その地位を与えられたのである。

ここに明確に神と人の関係が、人間は単なる被造物ではなく、創造主なる神が自ら人間に宿り、万物の霊長として天地万物を支配するものとして把握されたのである。ここまで来れば神人合一のわが国の神ながらの道の間人観と同じものとなるのである。

神は霊的存在であるが故にその姿を現すことはない。それ故に、神の全ての霊的・人格的性質を分かち持つ人間が、神の代理人として、天地万物を治めるものとされたのである。

「それゆえなんじは悟らねばならぬ、なんじが、わが創造の業の・最も完璧な頂点（absolutus colophon）であり、その・感嘆すべき集約（mirabilis Epione）であり、被造物の間にいる・神の代理人（Vicarius Deus）であり、わが栄光の冠（corona gloriae meae）であることを」²⁰

かくして、コメニウスにあっては、教育の任に当たるものは、子供に自らの尊さを自覚させ、子供の内なる神性を引き出す（これは人間を通して神ご自身を顕現することになる）ことによって、尊き神の創造のみ業を助けるものとならなければならないのである。コメニウスにとってこれは教育の目的ともなるものである。

第1章の終わりで、コメニウスは次のように締め括っている。「人間を形成する任務についている者は皆、万人がこのような・自らの尊厳 (dignitas) と卓越 (excellencia) との思いを生きるように導かなくてはなりませんし、この崇高 (sublimitas) を獲得する目的へ、一切の手段をむけなくてはならないのです。」²¹

かくして教育の目的は、人間は神の最高の自己実現であるという自覚を持たせることであり、そしてその目的を達成する手段が、教育方法となるのである。深き自己信頼の養成こそが教育上最も重要であり、人間のコンプレックスを克服する最善の方法でもある。これは、後述するが本学の教育方法論の核をなすものでもある。

前述した精神分析学者であるカール・A・メニンジャーが「おのれに背くもの (Man Against Himself)」の中で説いているように、自己軽蔑 (劣等感) の強い思いは、自己破壊衝動 (自己処罰的観念) を潜在意識に醸成させ、それが他者破壊と反社会行動へと潜在意識が導いていくのであるとする。それとは逆に自己信頼が自信を生み、人間に内在する諸能力の発現を助けることになるのである。

まさしく、潜在意識に自己信頼の念が刻まれるか自己蔑視の念が刻まれるかが人間の行動とその後の人生そのものの分岐点となるのである。それ故、コメニウスが書いているように自己の尊厳を自覚させることが、教育指導上最も重要なものとなるのである。

コメニウス自身の大教授学における具体的な教授技法の本格的議論は、ここから出発するのであるが、彼の紹介はこれで終えたい。

本論文ではコメニウスの教授技法の解説を目的としているのではなく、代表的教育学者の人間観をまず確認することで、本学の神道的理念に基づく人間教育の原点と、教育学上大きな影響を与え続けているキリスト教の人間観 (決して一様ではないが) とは、その本質において決して異なるものでないということと、この神聖なる人間観をいかに子供たちに自覚させることができるかという事が、教育上最も重要なものであることを理解してもらうことを目的としているからである。

コメニウスの教育論の本質をなすところの神に通じるところの自己の尊厳と使命の自覚こそが、将来の仕事をするに当たって天職の自覚を持つことの原点となるものである。仕事は神から与えられたものとして社会および人類に奉仕する精神を養うことになるのである。

同時にこれは、キャリア教育の原点ともなるものである。人生の節目節目で仕事を通して常に前向きに主体的に取り組みそしていかなる困難も乗り越えていくことができる精神につながるのである。また、その努力の過程において生きがいを感じるこ

ができるであろう。たとえ、色々な人生および仕事上の困難も自らを鍛え高め成長させる神の導きと捉えれば、それが生きがいの感謝の気持ちにつながってくるであろう。

この神の尊厳に基く自覚から自信を持って人生を切り開いていく勇氣と忍耐を大きく養うものであろう。またこの自覚から、あらゆる職に就いたとしてもそれを天職として取組む自覚も生まれてくるであろう。

その天職として努力していくことで、その時には見えていなかった最後の天職へ通じる道にもつながってくる。そこから、すべての経験は神から与えられた天職を全うするための尊い勉強であると捉えることもできるのである。

そういう意味で、マーランドが唱えているように、やはり本当の教育はキャリア教育に通じるものであると言える。

次に幼児教育の大家で、世界で最初に幼稚園を創設したフレーベルの人間観を見ていくことにする。

(2) フレーベルの「人間の教育」における人間観と教育の目的

フレーベルもコメニウスと同様キリスト教をベースとする人間観にたっているが、コメニウスよりその汎神論的傾向は一段と強く、神道的人間観・自然観により近いものがある。

「人間の教育」第1篇の冒頭から次のように彼は語っている。

「万物の中に、一つの永遠の法則があつて、作用し、支配している」²²「万物は、神的なもの即ち神からあらわれ、神的即ち神によってのみ制約されている。神にこそ万物の唯一の基礎がある。万物の中に、神的なもの即ち神が宿り、働き、支配している。万物は、神的なもの即ち神の中で、神的なもの即ち神によって安らぎ、生きそして成り立っている。万物は、神的なものがその中であつて働いていることによってのみ、存在する。この、それぞれのものの中であつて働いている神的なものこそ、それぞれのものの本質である。」²³

本来キリスト教は唯一神のみ認め、万物は創造主たる神の被造物であつて、神そのものの現われではないとする考え方が支配的である。フレーベルにあつては、神は創造主であるだけでなく、万物の中に法則として、神が宿り働き存在の本質をなしているとするのである。

人間もその万物の中の一つであるが故に、人間の本質も神性そのものであるとするのである。また、他の万物とは異なる人間の特別な神から与えられた使命として、神と同じ理性・知性が宿り、それをもって自己の本質・天職を認識し、自覚し神の使命を生きることが人間の完成であり、人生の目標となるのである。

「知性的及び理性的なものとしての人間の特別な使命、特別な天職は、彼の本質、彼の神的なもの、したがって神と彼の使命、彼の天職とを完全に自覚し、生きいきと

認識し、明晰に洞察し、もって彼の本質を自己の決断と自由とをもって自分の生活において完成し、活発にし、顕現していくことである。」²⁴

神を現すことがこの地上での人間の使命であり、天職となるのであり、それ故、人間の内なる神を自覚・認識させ、神性を自己の人生において発揮させるように導くことが教育の目的であり、本質であるとするのである。この点に関してはコメニウスの教育論と機を一にする。

「内面的な法則即ち神的なものを自覚と自己の決断とをもって純粹完全に実現することに向かって自覚的、思想的、知性的存在としての人間を刺激し取扱うこと、及びそのための道と手段とを提供することが、人間の教育である。」²⁵

フレーベルの特に幼児期の教育技法は、受動的・間接的・援助的なものであるとしているが、この文章の中にその特色が垣間見られる。人間が完全に自己の本質を自覚・認識するまでは、教育者はあくまで子供の神性を認め、その内なる神の自然な働き・欲求を受動的に観察しつつ、知的な働きを間接的に刺激し、又発達するような道具や環境を提供することが教育者の役割となるのである。

但し、この教育技法には、よくよく注意しなければならない点がある。人間の本来性には完全なる神の知性が宿るということを前提としないで、又、教育者が子供の神性を深く認識し尊重しないで行くと、子供の表面の言動が秩序を壊すものであっても「子供を信頼しなければならない」「子供は尊重されなければならない」という表面的な理解によって逆に教師が注意しないということになるのである。本当に人間の本質は神なる善なるものであるとするならば、その本質にふさわしくない言動に対して（特に全体の秩序を乱して他に迷惑をかける場合など）には敢然と注意しなければならない場合もあるのである。

いまま少しフレーベルの人間観と教育の目的の内容を見ていくことにする。ところでコメニウスと異なる点は、人間以外の自然や万物を人間が神に代わって支配するものと捉えていないことである。人間もその特殊な使命があるにしても、自然の一部であり、神なるものが宿っているのは同じである。それ故、神の現われである自然も、人間がそれを正しく認識し、その自然とも調和して生きることが、神と一体になる道であるとしているのである。ここにおいてフレーベルの人間観・自然観は日本の神道・神ながらの道の人間観・自然観と完全に一致することになる。以下少し長くなるが、締め括りの文章として引用しておく。

「かくして、教育を通じて、人間に内在する神的なもの即ち人間の本質は、人間において意識的に発達させられ、完成されなければならない。かくて、彼、人間はこの神的なものに従って自由に、自覚的に生活することにまで、人間の中に働いている神的なものの自由な表現にまで、高められなければならない。

教育、殊に教授は、人間をとりまいている自然に内在し、自然の本質を決定し、そしていつも変わらず自然の中に現れている神的なもの、精神的なもの、永遠的なものを人間に直感させ、認識せしめなければならない。・・・(中略)・・・。

教育全体は、自然が神から出てきているということ、神によって人間と自然が制約されているということ、人間と自然が神に立脚しているということを、教育、教授、教訓を通じて人間に意識させ、実生活において働くようにすべきである。

教育は、人間を、自己自身に関する明白な認識にまで、自然との和合にまで、そして神との合一にまで導かなければならない。それゆえに、教育は、人間を自己と他人の認識にまで、神と自然の認識にまで高め、そのことによって制約される純粹崇高な生活にまで高められなければならない。」²⁶

人間の教育は如何なる時代にあっても、子供に内在する神性への認識と尊敬を前提することなくして、成立するものではないと考えられる。私は改めて、世界的に著名な教育者達の教育哲学の背後には、かくまで強烈な敬神の念が存在しているのであるという事を再認識するのである。

そして知性であれ良心であれ人間に内在する神なるもの、完全なるものを顕現することが教育の本質であり目的であるとするのは共通である。その内在する神性を如何に顕現するかの方法が教育の技法となるのである。その教育法において教育哲学者間で若干の違いはあるが、教育の本質や目的については大きな差異はないといえる。

仕事において、自ら求めた内容でないにしても、その与えられた仕事を神の仕事として誠意を尽くして熱意を持って行うことが、その仕事を通じて神を現し、それを生涯の仕事そして天職としての仕事に高めていくことになるのである。この自覚を持たせることが、キャリア教育の要諦ともなるのである。

仕事を如何なる気持ち・心がけで行うかが、人生の成功不成功、生きがいや人生における充実感の深淺が決まるといっても良い。そういう意味でも仕事は人生そのものといっても過言ではないであろう。米連邦教育局長のマーランドが「本当の教育はキャリア教育でなければならない」と言っているのも、蓋し、極論とまで言えないと思われる。

次に、教育に志すもので学ばないものはいないほど、世界の教育史上に燦然と輝いているペスタロッチの教育論を見ていくことにする。

(3) ペスタロッチの「隠者の夕暮れ」における人間観と教育の目的

ペスタロッチもコメニウスやフレーベルと同じくキリスト教信仰者であるが、特に“神への信仰”の心を育てることを教育の原点においてるのが特色である。何故なら、神への信仰心こそが、人間の恵福と魂の平安をもたらすものであり、世の中の法と正義の原点であり、そして国家と社会の安定と平和の礎となると彼は考えるからである。

「人間は心の平安をうるように教育されなければならない。」²⁷

ペスタロッチの教育論はその点において、単なる個人の教育をその範疇とするものではない。個人の教育においてのみならず、為政者・君主はもとより世のリーダーそ

して富も地位もなき全ての人々に向かって、神への信仰を説くのである。彼が後世「人類の教育者」と呼ばれている所以でもある。

ペスタロッチにおいては、神は唯一創造神として人間の外在的存在としてあるのみならず、フレーベルと同様に人間に内在するものと捉えている。フレーベルと少し異なるのは、その神は具体的に人間の心の内奥に神の心として宿っているとする点である。それは人間に純粋な幸福を与える種々の能力であり、そして最高の知恵であり愛である。

但し、この恵福をもたらす力は、神を信ずるときにのみ発現するのであるとするのである。

それ故、神の心と等しき知恵が発現するように人間を高めていくことが、人間の教育の目的となるのである。

「人類に純粋な幸福を与える力というものはすべて技巧や偶然のたまものではない。それらはすべての人間の内に、人間のさまざまな本性といっしょにひそんでいるのである。それを引き出して育てることこそ、人類共通の願いである。」²⁸そして更にここから教育の目的に向かうのである。「この人間性の内にひそむ諸力を純なる人間の知恵にまで、万人ひとしく高めることが、最も下層の人々をも含めて、すべての人々に共通な一般的人間教育の目的である。」²⁹

この人間に内在する純粋な幸福を与える力を如何に引き出すかが、彼の教育技法となり、教育の第一の目的となるのであるが、しかし、教育技法の前に、内在の諸力を引き出し、高めるのは何よりも心の平安であり、その心の平安をもたらすための、“神への信仰”であるとするのである。

「人間は心の平安をうるように教育されなければならない。」「あなたの柔らかく、善良に、また感じやすく育てられた資性といえども、神なくして暴力と墓穴と死に耐える力はないのである。

神—それは我が家の父、わがしあわせの源、神—それはわが父、このような信仰によってこそあなたは、どんな暴力にも墓穴にも、動じない平安と力と知恵をうることができるのである。」³⁰

ペスタロッチはこの“神への信仰”の意義を繰り返し説いているのであるが、これは教育上の意義に留まらず、人類への啓示を説いたキリストのように強き信念を持って、すべての人々に説いているのが彼の独自性でもある。

「神への信仰は人生の平安の源である。人生の平安は心の秩序の源である。心の秩序はわれわれの諸能力の迷うことなき活用の源である。」更に続けて「神への信仰、それはすべての知恵と恵福の源であり、人類の純粋な教育に到る自然の道である。

神への信仰、それは人類の本質のうちに刻みこまれている。善悪の別の感覚のように、また正義と不義とをかぎ分ける消すことのできない感情と同じように、それは人間教育の基底としてわれわれの本性の内奥に、不動のたしかさをもって伏在しているのである。」³¹

ここで、注意しなければならないのは、彼によれば、この神への信仰心は、教育によって結果的に得られるものでなく、初めから人間の内奥に伏在している自然の心であり、人間教育の最初の基礎であり前提となるものであるとしていることである。神への信仰の根は、既に生まれながらにして人間の魂の奥に内在しているのである。教育によって、神への信仰心を植えつけるのではなく、その本質的に内在せる神への信仰心を引き出すのである。

以上、見てきたところから彼の人間観をまとめると、神—それはわが父であるとしているところから、人間は神の子であるということになる。しかも、父である神への信仰を我がこころの内奥に伏在せしめているところの神の子であるとすれば、神と神の子は一体であり、人間の内にも神の本性が宿っているという事になる。神の心が宿っているからこそ神を思う（神への信仰という気持ちが生じる）という事が言えるであろう。

人間は自己の内に経験しないものは認識できないように、例えば醤油でもお酒でも砂糖でも、その味を知らない人は、醤油やお酒や砂糖の味を思い浮かべることはできないであろう。それと同様に、人間の内にないものは人間は思い浮かべることはできないのである。人間の内奥に神が宿っているからこそ神を思い浮かべることもできるし、人間の本性のうちに絶対なものがあるからこそ、神なる絶対の存在を思い浮かべることができ、そこから神への強き信仰も生まれるのである。かくして父なる神は内在すると共に超越するものとして捉えることができよう。

このように、大教育者であるコメニウスやフレーベルそしてペスタロッチ達が、皆同様に神および神への信仰を人間に内在するものとして把握していることが、教育指導上実に重要なことである。この点を欠いた教育論は画竜点睛を欠くものといえよう。

ペスタロッチにおいては、神は人間に純粋な幸福を与えるすべての力の源泉であり、そのすべての力は既に人間の本性として内在しているとするのである。

それ故、繰り返しになるが、その人間に生来的に内在するすべての力を如何に引き出すかが、教育の技法となるのである。そしてこの世界における神なる絶対的存在への信仰こそが人間の魂に唯一の平安を与え、その人間の内在のすべての力を引き出す大前提となるのである。

この人間に内在するすべての力を引き出すことによって人間の仕事上の成果も社会への貢献もできるのは論を俟たないと思う。

確かに、魂の平安があつてこそ仕事上での困難も乗り越えることができるであろう。「平常心是道」という言葉もあるように、いかなるときにも、あわてず騒がず、動じず、心の平静を失わないことが、そのときに必要な知恵が生じる源であるとするのは古今東西の聖賢の語るところである。

茶道においてもその到達すべき究極の心境を「和敬寂静」としている。相互の尊敬そして相互の感謝の心で平和と調和を得ることで、そのところは静かに落ち着いている境地をいつているものと思われる。

ペスタロッチにおいては、そのような境地は、唯一絶対なる神すべてのすべてなる神への信仰の高まりによって得られるとするのである。そしてそのような境地にまで高めることが教育の目的となるのである。

その心が、仕事を積極的にそして柔軟に推進し人生を強く主体的に生き抜いていく力を与えるものとするのである。まさに、現代におけるキャリア教育の目指すものである。

ここで改めて繰り返すが、より重要なのは、何よりも、ペスタロッチのこの人間観である。先ず人間観があって初めてその後の教育法が出てくるのであるからである。どのように教育するかによって、人間を如何なるものに高めていくかという理想像が提示されることになるのである。それ故、一にも二にも先ず人間観が最も大切ものとなるのである。

そして、教育の世界に最も影響を与え続けている著名な教育者であり、また教育学者達が一様に説いている人間観が「人間は神の子であり、人間の魂の内奥に神の心を宿している存在である」と強く確信を持って認識していることである。その上で、それぞれが新しき教育技法を展開していることである。

しかし、人間観がいくら重要と言っても、もし仮にその人間観が性悪的な人間観であれば、人間への本質的な信頼感は生まれてこないであろう。そして人間の教育は犯罪者に対するように畢竟、矯正的とならざるを得ないであろう。

人間の本質が神性を宿すものであるからこそ、子供への人間への信頼が生まれて来るのである。だからこそ、そこから慈悲の心（他の苦しみや悲しみを自分の苦しみ悲しみとし、その苦しみ悲しみを除いてあげたい心）も、そして他の成功を共に喜ぶ心（仏教ではこの心を喜心と読んでいる。仏教ではこれに捨心しやしんを加えて「四無量心しむりようしん—慈悲喜捨じひきしよの心」として、これを尊き仏の心としている）も養うことができるのである。それはもともと人間には慈悲喜捨の心は誰にでも内存するが故にそれを引き出し育てることもできるのである。

いずれにしても、本学が目指すキャリア教育は、人間の本性が神なる心・仏なる心を宿すところの善なる存在であるということを前提として、その神聖なる人間の本性を先ず認め尊重することから始める必要がある。

子供へのこの絶対的信頼と尊敬の念なくして子供を強制的・命令的に親の言うとおりにさせようとして、子供の言動及び人生にルールを敷くとき、子供は自分は信頼されていないのだと誤解し、親や教師への反抗と憎悪の念が子供の潜在意識に刻まれていくことになる。その結果、潜在意識が将来の反抗的・反社会的行動へと導いていくことになるのは前述したところである。これに関しては、さらに本論文中のケーススタディーとして実例を用いて解説する。

結論から言えば、教育は子供の内在の神性を尊敬するところからすべては出発といっても過言ではない。

(4) 本学の建学の精神に基く人間観

本学の建学の精神における人間観は、「建学の精神」の冒頭に書かれている。

「本学は、宇宙の根源をなす神の意志を以って心とする平和理念に基づいた教育を根本方針として、……。」で始まっているように、先ず、宇宙には唯一絶対なる創造の本源である神がいますことを認めていることである。

これは神道において宇宙本源の神を天御中主乃神あめのみ なかぬしのかみ（「天地の初めのときになりませる神の御名は天御中主乃神」で古事記神話は始まる）としており、神道の神概念と一致する。

また、キリスト教においても、唯一絶対なる創造神を認めていることから、キリスト教の神とも一致する。

その唯一にして大調和（平和）の根元の神の御心を自分の心とすることが、本学の人間教育の原点であり、人格形成の教育の目的となる。その上で、心・技・美一如の専門教育による専門知識と専門技術をもって、人類社会の福祉の貢献する人材を育成することが本学の建学の精神である。

前述したように、神の心を自らの心とすることが本学の教育における人格形成の目標であるが、少し抽象的な表現なので、「筑紫の心」でもう少し具体的に表現されている。

ところで、神の御心とは具体的にはどのような心であろうか。神道的には人間の心を4つに分けている。本学では、具体的には荒魂（勇気）・和魂（親和）・幸魂（愛）・奇魂（知性）としている。この四つの心は、神の心の人間における具体的展開と捉えることもできる。

但し、注意しなければならないのは、勇気や愛や知性が、神の本性そのままにあらわれたものではないという事である。神の御心が勇気や愛そして知性や親和の心として現れるその過程において、人間に内在する欲望（名誉欲・所有欲・生存欲・金銭欲等）によって歪められた場合、勇気でも蛮勇（知性や愛に導かれない猛々しいだけの勇気）となり、愛でも「執着の愛（特に親の子供に対する過干渉・過保護の愛）」となる。そして知性も悪知恵を働かせる知恵ともなる。

しかし、反面、勇気は国や人を救うのに自らの命を捨てる勇気もあり、愛でもかわいい子には旅をさせる「放つ愛」から、十字架上で自らの命を奪おうとしている兵士に対して「神よ彼を赦した給え、彼は自分が何をしているか分からないのである。」と神の祈ったり、キリストのような汝の敵を愛せよという様な愛もある。知性にしても人類の発展と平和に寄与する科学上の研究・発明もある。

知性も勇気も人類の調和（平和）・進歩発展・成長に適った愛に導かれなくては、神の御心の表れとはいえないであろう。また愛も神の御心にかなう知恵に導かなければどうしても執着の愛に留まるであろう。

いずれにしても勇氣・親和・愛・知性の心のその奥には神の御心を内在せしめているのは確かであろう。

本学の教育は、神の御心に結びつく所の四魂の調和的発達をもって人格の完成としている。また、これをもって教育の目標ともするものである。

(5) 本学の建学の精神に基く教育観

何よりも子どもを人間としてどう観るか。この人間観が最も重要である。人間の本性が真に神なるものを宿すものであれば、神を尊敬し仰ぐが如く子どもたちを神なる神聖なるものとして尊敬しなければならないであろう。

子どもに接する親や教職員は、尊敬の念を持って、信頼して子どもに接しなければならない。現象としていかなる姿を持って前面に現れようともそれは、あくまで仮に現れた姿であって、人間の本質ではないとしなければならない。

本学に於ける筑紫の心をいかに育むか。それは、先ず第一に人間の本性の神聖なるものを深く認識することから始まる必要がある。その上で、勇氣も愛も知性も親和の心もみな神の御心を基盤としてすでに人間の心に内在しているという事を認識しなければならない。後から教育によって植えつけるのではないのである。

そして、心が認めたもののみ存在に入る（心ここにあらざれば見えども見えず聞けども聞こえずである）という原理からいえば、人間の本性の神なるものもこれを認めなければ現れないのであるということになる。同時に、人間に内在する神の御心の具体的表れとして内在する勇氣・親和・愛・知性の心を先ず認めることから始めなければならない。神は愛であり、勇氣であり、知性でありそして親和である。

神の御心といっても普通抽象的で分かりにくいものであるが、神道ではこのように具体的に四魂（荒魂・和魂・幸魂・奇魂）として表現している。但し、前述したように、その表れに段階や深淺があり、又、個人の使命・天分の差があるだけである。

コメニウスやフレーベルそしてペスタロッチが信じたように、また本学の神の子の人間観のように、その人間の魂の内奥に流れている神の心・神性を深く信じるところから人間の教育は始まる。

本稿を終えるにあたって

フロイドの精神分析的に表現すれば、人間の内在的攻撃性は、それがリピードに根ざすものであれ、それが、昇華という形をとって、破壊的なものから、創造的・建設的なものに転化していくことで、人間の魂は成長していくと見ることもできる。そういう意味で、人間における仕事が創造的（新規性）であればある程、人間の攻撃性が昇華されていくことになる。

モンテッソーリが指摘したように、人間における、幼児期からの仕事への志向を、いかに整えていき（これをモンテッソーリは教師の援助としている）、正しく、人類社会の進歩向上をもたらす、創造的建設的な成長につなげていくことが、幼児教育の重要な柱になると言える。

そして、子どもを尊敬し、褒め、認めるという教育的な他者暗示によって、子供の潜在意識に、その様な言葉が刻まれていくことで、子どもの自信となっていくのである。粘土遊び（土いじり）にしか興味のなかった子供が、遂には、名彫刻家として世界の歴史にその名を刻むことにもなるのである。それが巨匠ロダンである。

最後に、その巨匠ロダンの言葉で締めくくりたい。

「美はいたるところにあります。美がわれわれの眼を背くのではなくて、われわれの眼が美を認めそこなうのです。」

「凡庸な人間が自然を描写しても決して芸術作品にはなりません。それは彼が『見ない』で眺めるからです。」（傍点：中村）

自然の中にある、創造主の美を認める眼があって初めて、その美は存在に入るのであり、その自然の背後にある創造主の美を表現することで初めて芸術作品となるのである。

自然をただ眺め、それを如何に忠実に表現しても、それは、芸術ではないのである。

教育も芸術と同様である。教育とは、先ず子供のあらゆる現象（子供の良い感情も悪い感情も、そして良い行動も悪い行動もすべて含めて）の奥にある創造主の「光」を「神性」を認めそして観ることである。

モンテッソーリ、コメニウス、フレーベル、そしてペスタロッチ等の幼児教育の大家達が口をそろえて、子どもに内在するところの神性や創造主を認めることを力説しているのは、それが、教育の大前提となるからである。

教育者に、その現象の奥にある子供の神性を認め信じる心（眼）がなければ、子供の「光」は見えてこないのである。

子供の現象の姿そのままを見ているだけでは、子供の本当の「光」も見えず、見えないものは現れないことになるのである。教育の陥穽は、目の前の子どもの現象しか見えなければ、現象の悪い面が現れたとき、それに捉われて、子供を外から矯正しようとする事である。そして、その悪に捉われれば捉われる程、悪は現れるのである。

「観る」ものは、存在に入り、そして現れるという法則である。

しかし、「光」は、ただ見ただけでは現れないのである。その子供の光を表すのは、教育者の言葉である。人間の言葉には力があるのである。神道では、これを「言霊^{ことだま}」と言い、キリスト教では、「言葉は神なり」と言っている。更に、仏教でも「声字即仏性^{しやうじそくぶつしやう}」と言って、言葉の創造力を力説している。

教育も、言葉によって、子供の「神性」を引き出すのである。「光」を認め、言葉で、讃嘆することで、子供の潜在意識の中に、その言葉が入り込み、それがやがて、無意識の世界で芽をだし、そして、将来に開花することになるのである。

これが、本学園の建学の精神「筑紫の心」にある、「心の畑に種を蒔き育てること」である。種とは、言葉である。言葉の種を子供の心にまくのである。しかし、その言葉の種をまく前に、子供の魂の奥にある「神性」と「光」を信じ、そして、観なければならない。

子どもに内在する「神性」や「光」は、本学の建学の精神で言えば、具体的には、子供に内在する「勇気」であり「愛」であり、そして「知性」である。最後に、すべての人々と天地万物が、本来、生かしあいの世界に生きていることを象徴する「親和」の心である。

そもそも、子どもの「愛」を引き出し育てるのは、教育者の神性を拝む「愛」の心であり、愛の言葉である。同様に、子どもの「知性」を引き出すのは、教育者の「知性」を伴った言葉である。子供には、創造主の「知性」が宿っているので、ただ上から説教的に叱るだけでは、子供の「知性」を育むことはできない。愛と尊敬の心を以て、「理屈」できちんと説明しなければいけない。子供の理性に訴えなければならないのである。

しかし、これは、幼児や児童だけでなく大人でも同様である。

また。我が国は、大包容の生かし合いの心を「大和の心」と呼んできたが、これが、まさに「筑紫の心」でもある。

「筑紫（つくし）」とは、天津祝詞にある「筑紫の日向^{つくし ひむか}」、言霊的に解釈すれば、「つくし」は「つくす（尽くす一尽十方の意）」であり、「日向」とは、「日（太陽を象徴）」が、向う（広がる）と解釈すると、「筑紫の日向^{つくし ひむか}」とは、「太陽（光）が尽十方（四方八方すなわち宇宙全体に）に広がって、天地万物を包容し生かしている様を表していることになる。

それ故、「筑紫の心」は、そのまま「大和の心（大調和の生かし合いの心）」であり、「日の本の心^ひ（天地万物を生かす大包容の光の心）」となるのである。

これらの心が、子供たちの魂の奥に、「神性」として内在していることを認め、そして、信頼することが、本当の意味での子供を尊敬するということである。

日本の礼とは、そういう親和（大和）の相互礼拝のところが、具体的に表れた姿なのである。

子どもは、尊敬されることによって「自敬」の心が養われることになる。そして「自敬」の心は「他敬」の心を養うのである。他敬のころの中に、他者への「いじめ」も「暴力」の心も同居できないのである。

逆に、子供の潜在意識に自己否定的な言葉が刻まれ続け、子供が自らを軽蔑する心になると、それが、自己破壊衝動として潜在意識に形成され、その自己破壊衝動は、他者への破壊衝動となり問題行動へと転化（開花）していくのである。

将来、どの様な花を咲かせるかはひとえに、親や教師という、子供の教育に携わる者の双肩にかかっているのである。教育者の責任は誠に重大である。

-
- 1 マリア・モンテッソーリ著「子どもの発見」財団法人才能開発教育研究財団 日本モンテッソーリ教育総合研究所 P.12
 - 2 前掲書 P.16
 - 3 前掲書 P.18
 - 4 前掲書 P.37
 - 5 前掲書 P.37
 - 6 前掲書 P.38
 - 7 前掲書 P.40
 - 8 マリア・モンテッソーリ著 「子どもの精神—吸収する精神—」財団法人才能開発教育研究財団 日本モンテッソーリ教育総合研究所 P.20
 - 9 前掲書 P.21
 - 10 前掲書 P.22~P.23
 - 11 マリア・モンテッソーリ著 「幼児の秘密」財団法人才能開発教育研究財団 日本モンテッソーリ教育総合研究所 P.216
 - 12 前掲書 P.217
 - 13 前掲書 P.217~P.218
 - 14 前掲書 P.219
 - 15 A.H.マズロー著 「人間性の心理学—モチベーションとパーソナリティー」産業能率大学出版部刊 P.243~P.244
 - 16 コメニウス著 「大教授学」世界教育学名著選 2 鈴木秀勇訳, P.49
 - 17 前掲書、同所。
 - 18 前掲書、P.68。
 - 19 前掲書、P.50。
 - 20 前掲書、同所。
 - 21 前掲書、同所。
 - 22 フレーベル著「人間の教育」世界教育学名著選 8 岩崎次男訳, P.9
 - 23 前掲書、同所。
 - 24 前掲書、P.10。
 - 25 前掲書、同所。
 - 26 前掲書、P.11。
 - 27 ペスタロッチ著「隠者の夕暮れ」世界教育学名著選 13 梅根悟訳, P.21
 - 28 前傾著、P.19
 - 29 前傾著、P.20
 - 30 前傾著、P.25
 - 31 前傾著、P.26